

幸福度の高い村づくりのための 地域医療の役割

宮崎県西米良村長

黒木定藏



西米良村は宮崎県の中央部最西端に位置し、市房・石堂・天包山（米良三山）などの1,000mを越す山々に囲まれ、縦横無尽に走る渓谷や清流一ツ瀬川が美しい深山幽谷の山村である。現在の人口は約1,200人で、面積は271.51km²、地形は東西に狭く、南北にやや長いひし形をしており、面積の96%は森林となっている。

1997（平成9）年に全国に先駆けて取り組み始めた「西米良型ワーキングホリデー制度」は、交流人口拡大や地域活性化に大きな効果をあげている。村に滞在する費用を自分で稼ぐという制度で、遠くは北海道や沖縄など県内外を問わず、多くの方にご利用いただいている。

また、2013（平成25）年には気候・地形を生かした「西米良川床」にしめらかわどこをプレオープンした。「川床」は京都の鴨川や貴船が有名だが、西米良村でも自然そのものの“涼”を楽しむ場を作り、徐々に西米良の夏の風物詩と

message

なりつつある。



このような取り組みを行っている中、村民の心に「自分たちも地域振興のために何かをしたい」「自分たちの地域は自分たちが守る」という気持ちが芽吹いてきた。中でも高齢化率が72%にまで達していた小川地区では、地域の生き残りをかけ、2009（平成21）年に「おがわ作小屋村」をオープンさせた。

茅葺^{かやぶき}屋根の建物や日本の原風景を思い出させる田舎、また、地域の食材を使った看板メニュー「おがわ四季御膳」を求めて、年間4万人ものお客様にお越しいただく賑やかな地域となった。この地域づくりが評価され、平成25年度には全国の地域活性化事例を表彰する「地域づくり表彰」で最高賞の国土交通大臣賞に輝いた。このような山村へき地の村だが、村民の強い要望により市町村合併はせず自立の道を選び、幸福度の高いキラリと輝く自治体を目指して頑張っている。



地方の人口減少問題が深刻化している昨今、地方では都市部からの移住・定住を促進し、地方再生を行なおうとする機運が高まってきている。さらに、地域づくりは画一的なものではなく、地域の特性や独自性を活かした「安心安全な村」を創っていくことが求められている。

本村においても平成27年度に「むら創生課」を発足させ、移住・定住の促進、観光振興等に努めており、この2年間で85名の移住者を迎えるなど、成果も出つつある。観光客は年間13万5,000人にまで増加した。このように独自の取り組みができるのは、実は西米良村で移住者や観光客を受け入れる基盤が出来ているからであり、その中でも医療が果たす役割はとて大きい

ものがある。



村内に医療機関は西米良診療所だけしかないが、外来・入院診療を中心に救急医療や介護保険事業、予防医療など、幅広い分野に取り組むとともに、医師・歯科医師による往診、看護師や理学療法士の訪問、特養ホームや診療所が遠い地域への出張診療等にも取り組んでいる。

昨年度には全国に先駆けて遠隔医療の実証実験を開始した。各地区の公民館に看護師等が出向き、診療所と公民館をインターネットでつなぐ。タブレット画面を通じ、医師に患者さんが健康相談を行うことで、健康不安を取り除くのと同時に、医師を身近に感じただくことで、診療所受診を促す取り組みである。

また、慢性疾患の患者さんで症状が安定しており、かつ医師が認めた者を対象に、タブレットや携帯のテレビ電話機能を利用して診察を行う取り組みも始めた。診療所受診が億劫になる働き盛りの方や遠方の方にも受診しやすい環境を整えるためである。村に1つしかない診療所の医師は、村民全員の「かかりつけ医」である必要がある。村民誰もが気軽に受診でき、気軽に健康相談ができる体制づくりが求められている。



診療所には2名の常勤医師が勤務している。昨年度まで2名ともに県より派遣いただいていたが、本年度より念願であった定着医1名を確保することができた。今後は定着していただいた医師を中心として、医療・介護・福祉・保健がしっかりと連携し、村民皆さんが笑顔で暮らしていける「西米良村型地域包括ケアシステム」を構築していくことで、日本一幸福度の高い村になれると信じている。